

子ども時代と私(8)

私の中学生時代

—— 戦時中の三年間(2) ——

湯沢 雍彦



工場の中で

さて、前述したようなストイックな猛訓練は日常的なことだったので慣れっこになっており、精神的にはあまりこたえなかったが、本好きの私には、好きな読物や参考書が店頭からほとんど消えていくの

がたまらなかった。今からみれば信じられないことだが、学校には図書室もなく、日曜ごとに神田古本街へ行ってみても、児童書も文学書も学習参考書も全く見当らなくなっていた。僅かに、徳富蘇峰の『近世日本国民史』全巻と戦争本だけが新刊の棚に並んでいた。時局に合うものだけが刊行されていた



のである。もっとも、遠いイトコが佐々木邦の『トム君サム君』や吉野源三郎の『君たちはどう生きるか』を持っていたので、借りて読むという事はできた。しかしそれらは平和の時代の金持ちの暮らしが描かれており、遠い国の昔話のようで身につかなかった。そのうち、教科書さえも無くなってくるのだが、二年生（昭和十九年）の十二月からは軍需工場へ動員されたので（私達の学年が動員の最下限のようだったが）、その必要性もなくなったわけである。

十三、四歳の少年が工員として使い物になるのか。職種にもよるが、私の判断ではかなり役立ったのではないかと思う。新聞やラジオは小学生までも「少国民」とはやし立てていた。二年生は明電舎目黒工場、三井鉱山目黒工場、本多電気五反田工場へと分けられた

が、私のクラスは本多電気であった。アルカリ蓄電池を作り、それを炭鉱で使う大型電池ボックスへ封入する工場であった。いくつもの部所に分れたが、私は他の二名とともに製品検査室へ配属された。製品からサンプルを抜き出し、規定の濃度に適合しているかどうかを定量分析するのである。これは、材料の運搬やかくはんなどの作業に比べれば軽作業だがやや高級な仕事で、化学の知識を必要としていた。しかし化学のことは学校で学び始めたばかりで、分子表すらもよく知らなかった。そこで工場技師のKさんやMさんは、化学のイロハからピペットの持ち方、精密天秤の計量法まで教えてくれた。まるで教室のようだ可他部所の友達からは羨しがられ、肉体の疲れは感じなかった。工場二階隅に一台だけ卓球台があり、私は余ったエネルギーをそこに注いだので卓球だけは上達した。野球やバレーはやろうにもボールがなくテニスコートは全部野菜畑に変えられていたから、唯一のうさばらしがこれに

なった。

歌心を求めて

昼休みには、碁や将棋を工員と争う友が少なからずいたが、ラジオから流れ出る「月月火水木金金」や「出てこいニミッツ・マッカーサー」といった軍歌まがいの歌を合唱する者はほとんどいなかった。しかし「ラバウル小唄」や「同期の桜」を口ずさむ声は聞こえていた。

また、どういう動機からかは分らないが、その頃の日記にある新聞社が募集した「産業戦友愛の歌」の一等に当選したものの切り抜きが貼ってある。その二番はこうだった。

汗の作業衣は ほまれの晴衣

これでゆこうぜ 勝つまでは

きつと最後は こっちのものよ

明るく元気で ナア兄弟

明るく仲よく やり抜こうぜ

しかしこの歌は、私を知る限りちっともはやらなかった。我々は決して沈んでもいなかったし、暗くもなかった。しかし、状況の悪化から、我々の意気込みはカラ元気のようになる感じを否めなかったのだ。泣くこともなかったが、本当に笑える日もなかったのである。夜は昔の詩と共に時に新聞を飾る詩を読んで気をしずめるようにした。その頃私の日記に書き写したもので、今でも忘れ難いのは「前線にて一勇士の詠へる〈笑〉」という題の詩であった。

笑ひ忘れて幾月ぞ

胸を拡げて心より

笑ひあひしは何日の日ぞ。

遠き昔の晴れし日の

青き夢にはあらざるか。

弾丸と爆撃たえまなき

いくさの庭に起き伏して

すでに心の荒びしか。

雨とちこむるジャングルに

わづかに凌ぐ露しづく。

飯のすまひに疲れはて

飢えてはてしかわが心、

あゝ、笑はざる幾月ぞ。

いざ耐へ待たん、今暫し

やがて勝鬨あぐる日に、

友と笑はん、高らかに、

腹裂けんまで、

口割れんまで。(吉田嘉七)

木村先生の教え

もちろん、その間にも先生方は手分けして工場内の生徒を見にこられ、いろいろな深い印象を我々に与えて下さった。

中でも忘れ難いのは、木村武夫先生のことである。木村先生は、私のクラス担任になったことは無

かったが、学年主任として一年から五年までずっと持ち上がりだったので、四十歳前後の働き盛りのエネルギーのすべてを、生意気盛りの少年たちに傾注されたのであった。

一年に入學した時二九〇名であった我々は、戦争のために、中退・転校・編入・再転入などの移動が激しかった。しかし木村先生は、のべ四〇〇名近くにも及んだこの学年のすべての者の顔と名前と出身校を覚えていたので、どんなはずれ生徒も、先生の眼光からのがれることはできなかった。

英語の担当であったが、不意試験であれ、期末試験であれ、その採点は実に厳しく、文法の違いはもちろん、一スペルか一日本語が違っていても、五ポイントずつ差し引かれるので、八十点以上を維持するのは容易なことではなかった。

しかし、まともな授業が受けられたのは、二学年の十一月までだった。動員で勉強をしなくてすむようになつた我々は、内心ホクホクして一人前のおと

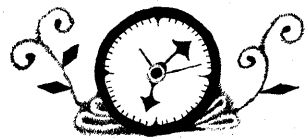
なのように、工場の中で毎日を送るようになった。教壇に立てなくなった先生は、生徒が分散した工場をこまめに回って歩かれては、「勉強を忘れるな、きつと物を言う日が来るから」と繰り返された。数学や理科はともかく「敵性語」と指定された英語の担当者として、切歯扼腕される気持ちが表示されたお顔には、いつも悲痛なかけがあった。

昭和二十年八月十五日、終戦の日を私は、次の動員先「中島飛行機・三鷹工場」（現在の富士重工）で迎えた。ジリジリと真夏の太陽が照りつける正午、エンジンに穴をあける作業を中止して中庭に集められた我々勤労学生は、聞きとれぬ玉音放送が終わったあと先生の目から熱い涙がこぼれ落ちるのを黙って見ていた。先生は細かい状況については何も説明されず、ただひとこと「戦争は終わった。また勉強を始めよう。それが私達の仕事だから」とだけ言われた。

東京新宿の焼け野原の只中に立つ校舎は、幸いに

焼け残ってはいたものの、ノートも教科書もカバンも失った我々は、何をどう勉強し始めれば良いのか、見当もつかなかった。しかし第二学期は、早くも八月二十七日から始まっていた。

先生は、当時貴重品のひとつであった謄写版原紙をどこからか入手し、それに英語リーダーと文法のテキストをていねいに書き写され、粗末なわら半紙に刷っては、授業のたびに我々に配られた。それが三か月経ち、半年経ってそろえると、教科書そっくりのように製本できるのが驚きであった。コピー機械はもろろなく、黒板に書いてノートに写させるだけの授業が大半であった。当時において、これは大変な努力の成果であることが生徒にも良くわかった。我々もそれに応えなくて





はならないという気に、自然にさせられるのであった。予習や復習を怠って我々が返答に窮すると、先生は目を大きくしてにらみ据えた。指示棒でたいたり、チョークを投げつけたりする先生よりも、この目の方が我々にはこたえた。

「今日のことを明日に延ばすな」「その時その事に全力を尽くせ」。静かな口調でそう繰り返された先生の言葉は、今でも耳に焼きついている。我々の学年から、同時通訳の開拓者、国弘正雄や、文化学者の加藤秀俊のような英語の達人が出たのも、先生の英語教育法と無縁ではないだろう。

私自身、教師のはしくれになって三十年近くになるが、木村先生のような情熱と人格が伴う教育者には、いくつになっても及びそうもない。今振り返ってみても、生育環境としてはこの上なくひどい

中学生活だった。だが、それを理由に挫折してしまつた者は一人も出なかつた。弱気を許さなかつたきびしい状況は、よき師・よき友に恵まれる限り、思春期の少年にとっては、あるいは最上の教育条件になつたともいえるのである。

(郡山女子大学)

なお「木村先生の教え」の一部は、「熱情と人格が伴う教育者」(未来社編『十代にどんな教師に出合つたか』一九八五年)から転用しました。